



(挿絵: 平田美紗子作)

森林保険制度創設80周年 記念シンポジウムを開催しました

森林保険制度は、火災による災害跡地の復旧や林業経営の安定を図ることを目的として、昭和12年に創設され、今年80周年を迎えました。森林保険センターは、これを記念し、10月31日(火)に学士会館(東京都千代田区)において記念シンポジウムを開催し、関係団体、森林組合系統等から約200名のご来場をいただきました。

当日は、森林保険の普及・発展にご功績のあった団体の表彰を行い、理事長感謝状(4団体)、保険センター所長感謝状(8団体)が授与されました。(下記参照)

筑波大学の興枙(こうろき)准教授による基調講演では、「転換期の森林保険制度」というテーマで、森林保険制度の変遷や保険加入に関する考察等を行い、今後の森林保険の展開方向などについてご講演いただきました。



▲興枙准教授

その後のパネルディスカッション「森林・林業におけるリスク管理」では、森林気象害の発生傾向やリスク管理などについての話題提供のほか、広域合併した市町村や森林組合系統における加入促進の問題点や、推進体制の再構築が今後の活動のポイントとなるといった課題提起もありました。

森林保険センターは、90周年そして、100周年に向けて、保険契約者などに対するサービスの向上など、よりよい森林保険となるよう一層努めてまいります。



▲パネルディスカッションの様子

森林気象災害の傾向について

シンポジウムにおける話題提供の一部をご紹介します。

森林総合研究所

森林災害・被害研究拠点長 後藤 義明

森林気象害の発生傾向について簡単にご紹介します。2005年から2014年の災害別面積は、風害が最も多く、次に雪害が多い状況です。1981年から1990年では雪害が圧倒的に多く、その他の災害も現在よりかなり多く発生していました。

森林気象害による被害区域面積 (面積:ha)

	雪害	凍害	風害	火災	干害	水害	潮害	噴火災
2005 ~14年	1,347	242	2,472	980	704	276	1	0
1981 ~90年	20,984	5,204	4,625	3,783	3,732	790	147	94

現在の雪害は、樹木に積もった雪の重みで木が倒れたり折れる「冠雪害」が多いですが、80年代は「雪圧害」といって、苗木が雪の重さに耐えきれず潰される被害がかなりありました。これは80年代は幼齢林が多かったためで、現在はその森林が成長して冠雪害が多くなってきています。凍害は幼齢期に多く発生することから1980年代に非常に多かったのですが、今は被害が減っています。凍害や干害は起きる年、起きない年があります。火災は減少傾向ですが、時に大きな火災が発生します。今年も各地で大きな被害がありました。

林齢別の被害割合では、風害や雪害の多くが20年生以上の成長した人工林で起きています。これに対し干害の98%は5年生以下、凍害も99%が10年生以下の幼齢林で発生しています。順調に成長した森林の区域が凍害や干害は起きにくい場所と判断するのは間違いです。植栽した頃に極端な乾燥や低温がたまたまなかったためで、例えば、今後伐採、新植が行われて林地の状況が変われば、凍害や干害が発生する可能性はあるのです。

気象条件や林齢による災害の発生傾向を理解して災害に備えることが重要です。

◆森林研究・整備機構理事長感謝状(4団体)◆

盛岡広域森林組合、いわき市森林組合、金沢森林組合、邑智郡森林組合(島根県)

◆森林保険センター所長感謝状(8団体)◆

宮古地方森林組合、ふくしま中央森林組合、大田原市森林組合、中蒲みどり森林組合(新潟県)、日吉町森林組合(京都府)、熊本市、島根県森林組合連合会、鹿児島県森林組合連合会

おめでとう
ございます!



発行元：国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林保険センター
(HPアドレス：<https://www.ffpri.affrc.go.jp/fic/>)

挿絵(松ぼっくり): 左コマツガ・右キタゴヨウマツ